

序 章 研究のねらいと方法

1 . 調査研究の視点

今年度は、昨年度の研究成果を踏まえ、引き続き「クルマに依存しない郊外生活」の可能性を探った。この課題への取組一年目であった昨年は、さまざまな視点を持つ研究者による議論の中から、「クルマに依存しない郊外生活」をどのように考えるべきかについて取り組んだ年であった。

本年度は、昨年の成果から得られた「クルマに依存しない郊外生活」を可能にするための3つの視点、新しい「システム」の導入、人々の「意識」をかえる、「まち」をどのようにつくるか、のなかでも、特に「まち」をどのようにつくるかに着目して研究をすすめた。

昨年のアンケート調査では、「歩いていけるところもクルマでいく」と答えた回答者が半数近くをしめ、研究会の委員一同大変驚いた。このような「クルマ依存生活者」を「自分の住む住宅地の中を移動するときは、歩いていく」という気にさせたい。そうすれば、バスの利用も進むだろう、住宅地の中の商業施設も利用する人がふえてくるだろう、このように人々の生活が変わっていけば、クルマに依存していない、歩いて暮しているあるいは、歩いて暮さざる得ない人々にとっても暮らしやすい住宅地となるに違いないと考えた。

そこで、本年度の研究テーマを「歩いて暮らせる住宅地のつくり」と定めた。箕面市内には、第二次世界大戦以前に開発された住宅地から、近年開発されたばかりの住宅地もある。これらの住宅地のつくり方は、そのときどきの計画論や道路法の影響を受け、異なっているように見受けられる。そこで、開発年代の異なる住宅地の徒歩圏内の暮らしに着目し、調査研究を行なった。

本研究では、一般家庭の自家用車を表す言葉として「クルマ」を用いることとする。

2 . 調査研究の方法

本年度は、大阪大学大学院工学研究科に所属する4名の研究者を委員とし、同、環境工学専攻都市環境デザイン学領域の学生などをまじえて研究会を組織した。年間2回の研究会を予定していたが、必要が生じたため臨時の研究会を1回行なったため、年間3回の研究会を開催した。

調査対象地は、箕面市の南部に位置する住宅地の点在する地域である。

調査研究内容は

(1) 開発時期ごとの住宅地のつくりの比較調査

(2) 開発時期の異なる住宅地に住む居住者のクルマとの関係と、徒歩圏内での暮らしを明らかにするアンケート調査を行なった。

委員とワーキンググループのメンバーを以下に示す。

委員メンバー

澤木 昌典（大阪大学大学院工学研究科教授）
小浦 久子（大阪大学大学院工学研究科助教授）
松村 暢彦（大阪大学大学院工学研究科助教授）
岡 絵理子（大阪大学大学院講師）

ワーキンググループメンバー

上田 ちひろ（大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士前期課程2年）
岡本 真紀（大阪大学工学部地球総合工学科環境工学科目4回生）

研究会の開催スケジュールは、以下のようであった。

- 第1回 6月15日 本年度の研究課題の設定
- 第2回 8月3日 調査計画の決定
（地図データ調査実施）
- 第3回 12月19日 アンケート調査表の設計居
（アンケート調査実施）
（アンケート集計）

第3回研究会以降は、随時集り、集計方法などを検討した。